

オーストラリア華文文学

－ 心水武侠小説の読解 －

荒井茂夫

はじめに

武侠小説と微型小説の合体は、凌鼎年の〈中国武侠微型小説選〉が最初のまとまった作為品集であろう。中国では90年代に入って微型小説即ちコント、ショートショート分野が台頭し、星新一の作品が翻訳されて大きな影響を与えた。こうした流行を背景に、2000年以降中国国内の微型小説作家が一般的に長編が多数を占める武侠小説の精髓を微型小説の中に凝縮することを試み始めたのである。

華文文学世界では1996年にシンガポールで「第一回世界華文微型小説国際研討会」が開催されて以来、2年ごとにタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア、ブルネイ、上海において開催され、本年は香港で開催される予定である。参加者は東アジア諸国からばかりでなく大洋州、欧米からも多数来る。華文文学の作家は職業作家は少数であるために、多くのアマチュア作家にとって2000字前後で構想を凝縮させる微型小説は限られた時間で創作を可能にすることができる効果的な形式なのである。「華文微型小説国際研討会」はすでに組織化され世界華文小説学会の名称でシンガポール政府に登録されている。中国を含めた国際的な中国語による微型小説に特化した文学活動が展開され、その中で近年伝統的武侠小説を微型小説という形式によって創作する試みが続けられているのである。

本論文では、そうした試みの例として、また中国以外の地における華文文学の典型として、華人作品の個性が表現されているオーストラリア華文作家心水の武侠微型小説作品を読み解く。

1. 心水の作品

心水はペンネームで、本名黄玉液、小説や散文集以外に微型小説集としては「蟻を飼う女」（1998年）、「溫柔の春風」（2000年）が出版されているが、微型武侠小説作品集は正式には出版されていない。（来年出版予定）資料として手元にある作品の多くは作者から頂戴したもので、華字紙の文芸欄に発表された作品もあるが大部分は出版公開されていない。作品を創作年度別に分けると一覧ようになる。これによると「武侠」と「微型」の合体を試みたのは2003年9月の「挑戦」が嚆矢で、以降2008年までの作品38篇の内、26編が武侠微型小説である。興味深いのは「武侠」と「詩」を合体する試みまで手がけていることだ。心水の「武侠」に対する思い入れの表れであろう。

澳洲心水微型小説作品一覧（（ ）内は創作年月日）

2003年

- 挑戦 (030924) 武侠
- 擂台 (030925) 武侠
- 琴簫情 (030930) 武侠
- 狭女 (031014) 武侠
- 武侠 (031014) 武侠
- 無敵剣 (031025) 武侠

2004年

- 武林高手 (040226) 武侠
- 鏡花水月 (040303) 武侠
- 孤帆遠影碧空盡 (040312) 武侠
- 蘭子女狭 (040324) 武侠
- 狭之大者 (040416) 武侠
- 尋仇 (040522) 武侠
- 隱狭 (040801) 武侠
- 無相神功 (040807) 武侠
- 無情刀 (041022) 武侠
- 紅纓槍 (041111) 武侠
- 剣気 (041226) 武侠

2005年

- 柳含月 (050119) 武侠
- 刀痴 (050706) 武侠
- 白清 (050709) 武侠
- 逍遙派 (050721) 武侠
- 月臺 (050930) 武侠
- 影子 (051013) 武侠
- 飛鴿傳書 (051101) 武侠

2006年

- 江湖 (060905) 武侠

2007年

- 大老闆 (070517) 非武侠
- 籃子 (070623) 非武侠
- 臉譜 (070819) 非武侠
- 被告 (070913) 非武侠
- 戦火 (070929) 非武侠

2008年

- 阿歛 (080221) 非武侠
- 王者之劍 (080315) 武侠
- 河豚、和牛與鯨肉 (080409) 散
- 相思 (080713) 詩(武侠)
- 寿星婆 (080905) 非武侠
- 玉玲瓏 (080826) 非武侠
- 傷心劍 (0806) 詩(武侠)
- 柳葉刀 (080705) 詩(武侠)

武侠微型	26 篇
非武侠	8 篇
武侠詩	3 編
散文	1 編
合計	38

2. 心水武侠微型の特徴

心水作品の特徴を端的に表現すると、古装武侠のイメージから現代オーストラリアへのスライド、ということが出来る。即ち、中国的舞台背景のストーリーが一転して外国へ場面を変えて継続する所に作品の特徴と面白さがある。＜鏡花水月＞のように、アメリカにスライドする作品も含めて、物語の展開を一足飛びにスライドさせることによって中国的武侠世界が、異次元の外国における華人の生活の中に出現するのである。読者は突然異文化社会の中に連れてこられて、一瞬とまどうことになるが、その後、古装武侠的連想の中にあるべき中国の歴史的社会的背景のほとんどが、場面がスライドする過程で消失し、中華的「狭士」が個人として、オーストラリアの現代社会の生活者に変わっていることに気づく。そこに不思議な幻想的文化的引

力を感じさせるのである。

これは、海外華人の心理の一面を象徴する意識が表現されていると言えるのではないだろう。即ち、海外の華人はすでに中華文化の故郷からは時間的にも地理的にも遠く離れており、多くの華人が遠い中華文化の故地に対する憧憬を抱いているが、その一方では、もはや離れることはない在住国に対する強い愛着がある。その中で、現実に生活している在住国社会に、様々な中華の「俠士」に仮託して憧憬の中華文化をスライドさせ、虚構の中で憧憬の現実化を提示していると言えるのである。恐らく作者の意図とは別に、海外華人社会を知っている者には、そのように読み解けるのである。或いは作者の中華文化に対する潜在的憧憬が時間空間を飛んで自らの手元に引き寄せる動力となっているのかも知れない。作品の中で描かれているプロットはあまり複雑ではない。複雑な構成は微型小説という字数を限られた型式では往々にして作品をつまらなくさせてしまうものだ。心水作品の時空のスライドという特徴は、単純な構成でありながら一点強烈なプロットの展開となって、読者の審美意識を満足させるのである。

また、武俠小説は大衆の娯楽的読み物という側面を持っているが、心水作品に描かれる時空を超える奇想天外なストーリーの展開は、その娯楽性の中にこうした華人の心理を縫い込んだ作品となっているのである。

3. 作品読解の一

例えば、〈挑戦〉は主人公の甘勝が、壮年になって中国武術を海外に広めようとしてオーストラリアに渡る話だが、峨眉山中で武芸を学び〈蜻蛉派〉の開祖として中原武林に名を轟かせた人物として設定されている。オーストラリアに渡ったのは中国が開放されてから、となっている。従って40才ほどの年齢と仮定できるが、1909頃の生まれならば、霍元甲や黄飛鴻などの中国で実在した英雄的武術家の物語が通用する時代で、映画にもありそうなく江湖〉という伝統的アウトロー世界の様子を連想させる。しかしそれが、一転して場面はメルボルンに飛ぶのである。そこで甘勝は道場を開き、学生を通訳にして大いに宣伝活動を行い門弟を集め、数年の内に市内に多くの道場を開くまでになった。

ところがメルボルンにはすでに剣術、柔道、詠春拳、太極拳、螳螂派拳法など様々な武術館がすでに存在し、それぞれの武術館はみな自分が天下一と考え、武術によって生活する武術業界といえる世界があるのである。そこに突然聞いたこともない蜻蛉派拳法が市場に参入して道場を増やし門弟を増やして大きくなったことは、即ち他の武術館にとっては市場を荒らされたに等しいことであった。そのために道場破りに来る武芸者が絶えなかったが、甘勝は東洋的「容認の美德」によって接待や金銭で解決し、戦うことを避けたのである。

正に、中国古装の武俠イメージを、広告や市場原理という武俠小説にはない現代的要素とともに西洋人社会の中にスライドさせているのである。

最終的に、甘勝は挑戦を「容認の美德」だけでは回避することが出来ず、「西洋自由搏撃学院」(ボクシング)の巨漢ピーター院長と戦うことになる。ピーターは甘勝の一撃一撃が皆要害を打っているのに力が入っていないことを訝ったが、そんな疑問には構わず、一撃のもとに甘勝を打ち倒した。敗北した甘勝は行方知れずになり、ピーターの門弟は増えた。

ピーターは甘勝の攻撃が東洋的「容認の美德」であることなど想像も出来なかったのであろう。東洋的美徳は現代西洋人には通用しなかったのだ。或いは甘勝のこの美德は、実は移民と

して西洋人社会に暮らす華人の遠慮であったかも知れない。いずれにせよ甘勝のこの要害を攻めながら手心を加えるという、侠客の精神にある憐憫の正義感や「容認の美德」などは功利的現実主義の現代西洋人社会では通用しない価値である。だからこそ作者は自ら生活している西洋人社会にはない中華文化に対する憧憬を侠客に仮託し、物語のスライドという手法によって、在住国社会に移動させたといえる。

4. 作品解読の二

〈琴簫情〉も典型的な“スライド”型式の作品である。

主人公は江湖の侠客簫無極である。無敵の銅簫と呼ばれ、弱きを助け強きを挫き、多くの人助けをしたが、その簫の音には何故か哀愁がこもっていた。彼が一カ所に長く止まることなく流れ行くのは、復讐から逃れていたためだ。ある年、崇山であてやかな美女に出会うが、突如打ちかかってきた、武器はなんと琵琶であった。簫無極は銅簫十八式で応じた。一進一退する内に女が盤坐して、琵琶をかき鳴らし始めると、意識が薄れ引きつけられそうになったが、突然琴線が切れたので危機を脱することが出来た。何故の攻撃か問うと、女は峨眉派三十七代の承門、冷血艶と称し、ずっと簫無極を探していたのだと言う。簫無極は恨まれる理由が分からなかったが、師匠の臨終の遺言は、「世代を超えた恩讐を溶解せよ、復讐は終わることがない。」というものであったことを想起した。

さてここまでは、読者の想像の中に作られるのは正に中国を背景として古装武侠小说のイメージなのである。それがまた一転して場面がオーストラリアの景勝地クイーンズランドのゴールドコースト、しかも現代にスライドするのである。

冷血艶に好意を抱いた簫無極はまた出会うことを願ったが、その機会もなく、瞬く間に数年過ぎた。簫は南半球には千山万水の仙郷だと聞いて、意を決してゴールドコーストに移住したのである。

簫無極はゴールドコーストの海岸で銅簫を演奏して西洋人や観光客から祝儀を得て生計を立てるようになったのだが、中国江湖の俠客人生から一転して、芸を売って生きる一介の華人移住者の人生へ展開するである。

ある日いつものように銅簫を奏でていると、行き来する観光客の中に琵琶を抱えた冷血艶が現れた。冷血艶は簫の傍らで琵琶をかき鳴らし、簫は銅簫で対抗した。音の中の殺気は徐々に薄れ、二人に視線が合うとゴールドコーストの美しい陽光の中で微笑みに変わり戦いは終わった。これが武侠の使い手が簫と琵琶を奏でて、実は戦っていることなど全く知らない西洋人聴衆は、すばらし演奏に皆拍手してご祝儀を出したのだが、彼らの目には二人の侠客は単に華人の音楽家として映っていたのである。異境で同じような境遇で生きる二人は結ばれ、ゴールドコーストの海辺で演奏をして暮らすようになった。

この作品もやはり中華文化的な価値も異文化社会の中では変容を迫られることを表象している。また異国で孤独な元侠客の男女が結ばれオーストラリア華人としての生活が始まるのである。俠士を俠士たらしめている社会、文化、歴史から抜き出して異なる環境に置くと、それはそのまま海外華人の生活そのものの反映となるのである。

5. 作品解読の三

<紅纓槍>は、中国的古装武俠が西洋人社会にスライドしたことによるギャップを滑稽に描いたものだ。

丁成師匠は齡耳順だが、武芸十八般の武器をどれもこなすことができ、江湖で特に知られた武器は紅纓槍であった。ただ息子の丁功が跡を継ごうとしないばかりか、用心棒家業も時代とともに廃れるいっぽうで、長年苦練して完成させた紅纓槍も、やがて単なる特技になってしまうことを心配していた。

ここで話は南転する。八十年代に中国の開放政策によって留学ブームが起り、丁功はメルボルンに留学し、その後商売をはじめて成功した。メルボルンの主流社会にとけ込み、射撃クラブにも入り、多くの友人を作った。ライフルから拳銃まで、射撃は上達した。成功した丁功は中国の父母を呼び寄せた。父の丁成は息子が家も車も所有し成功したのを見て驚き、また喜んだ。ある日中国から持ってきた紅纓槍を取り出し裏庭で練習している姿を隣の西洋人が見て感心し、メルボルンの雑伎団で働くことを進められたことに愕然とした。自分の極めた技が雑伎同様に見られたのだった。息子には、もはや時代は違う、槍術がどんなに上手くても雑伎になってしまう時代だといわれ、同じ“槍法”でも僕のは違うという息子の言葉に、練習もしていないのに槍術が出来るのかと考えた。丁成は「槍」が銃を意味する華語であることを思い付かなかったのだった。それほど槍術に思い入れを持っていた。

狩猟の時期に息子に連れられて大勢の狩猟協会のメンバーが競っている猟場にきて、息子の百発百中の技を見た。そこで丁成は、自分が長年かけて修練した槍術が、瞬間に雑伎になってしまったことを認めざるを得なかった。遂に決心して帰国し、武林に回状を回し“金盤洗手”し槍を封じて江湖を離れることを宣言すると、オーストラリアに帰って庭いじりなどをして悠々自適に過ごした。しかし誰もこの老人が絶技を秘めた神州武林の使い手であることなど知る由もなかった。

八十年代以前と以降の中国武林が如何なる世界を指しているか、想像できないという疑問はあるが、それは武俠小説の娯楽性と空想性として理解すべきで、この作品のモチーフは、やはり海外華人としての作者の独特の視点で、在住国に適應した華人社会が失わざるを得ない中華文化を表象しているといえよう。

6. 作品解読の四

<無敵劍>は、中国古装的イメージから武俠が突然現代オーストラリアに出現するという南転スライド型式ではなく、当初から場面はオーストラリアである。

すでに移民社会が定着している中で、中国中原武林とオーストラリア武林、中国江湖とオーストラリア江湖を分けて叙述する、というような発展がある。

オーストラリアには様々なマーシャルアーツの練習場、道場がある。様々な人種の指導者、学生がいる。そこに“無敵劍”が中国中原的な俠客観念で乗り込んできて、道場破りを始めた、その理由は、中華武術が侮辱されているからだ、というのだ。

首都キャンベラの当地武林、当地江湖の立場から、即ち移住した華人社会からみると、中

国の武当山から派遣されてきた“無敵剣”は、よそ者と言うことになる。とはいえ、挑戦されたからには、武林、江湖の習慣ならば、あくまで尋常の勝負によって雌雄を決するのが侠義の人であった。

しかし現実には、各派の道場は皆武術を教授することで生計を立てているので、負けると分かっているには挑戦を受けるわけにはいかない。負ければ門弟が離れていくのである。そこで武俠的価値から離れた、現代西洋人社会の法律的手段を以て、対処し、權益を守るほかなかったのである。何人もの道場主から営業妨害として訴訟を起こされ、耐えきれなくなった“無敵剣”は、最後には中国武当山に帰って、師父に報告するところで話は終わる。どのような侮辱が原因で武当山から派遣されてきたのか不明であるが、この作品のモチーフもやはり中国江湖の義侠の世界も、西洋人社会にひとたび入ると侠客の精神や武功も西洋の論理に飲み込まれてしまうという現実をモチーフとしている。或いは中国的価値は西洋社会では通じないのだという、批判を読み取ることも可能である。それはこの作品そのものからではなく、作者のベトナム難民華人としての体験に基づいた主義があることが前提となっていて、それが構想や行間に表出している。そのように読み取ることが出来るのである。だからこそ作品に意味があるのである。

作者はベトナム解放の数年後、所謂ボートピープルとして、家族とともに数百人の難民に混ざって南シナ海海上で生死の間を彷徨し、着の身着のままオーストラリアに保護され西洋の人道主義の保護の下で市民として平等の権利を得て豊かな生活を得るまでになった。その半生には、ベトナム共産党の圧政、華人に対する抑圧、共産主義に対する嫌悪が根底にあり、同時に西洋の人道主義や民主主義に対する信頼があることを想像できるのである。それは次の「擂台」という作品からも読み取れる。

6. 作品解説の四

胡二刀は江湖に名を馳せた祖父胡一刀から剣術を学び二刀流の達人となったが、江湖であまりに名を知られたために挑戦する者が堪えなかった。ある時申し合いで相手に傷を負わせてしまい、失血死させてしまった。ところがそれが村の共産党委員会書記の息子であったのだ。後難を恐れた胡二刀は遠く海外に逃れることを思い立ち、メルボルンに移住した。そこで皿洗いをして隠れ住んだのだが、その剣術の技を雇い主に見られ、店の宣伝のためにメディアを通して紹介され、広く知られるに及び脚光を浴びるようになった。そんな時中国から苗天山という剣客が現れた。苗天山はかつて祖父胡一刀と死闘を展開した苗人鳳の孫に当たる男で、いわば胡一刀と因縁のある侠客がやってきたのである。脚光を浴びていた胡二刀は逃避することも出来ず、手合わせせざるを得なくなった。両者は結局真剣を使わず、決着もつけず、怨讐を解いて和解するのだが、作品では苗天山の出現の必然性にふれていない。また最後の和解についても武俠小説的緊張感という面白さに欠けることは否めない。せっかく現代中国の抱える問題の一つである地方党组织の権力乱用や腐敗という問題を象徴的に描写しながら、ずばりと切り込まない故に、冒頭で描写した出国の要因を最後に明確に結論づけずにはぐらかすような展開になってしまっているように感じられる。苗天山は本来村の党書記が送り出した刺客であるべきで、そうであれば一貫した物語の展開となるのである。恐らく作者は共産党に対する批判のを構想しつつも避けたのではないだろうか。

中国がイデオロギーの時代から中華民族主義に求心力を求める時代になった今日、共産主義

及び共産党に対する嫌悪は沈殿して意味が薄れ、本来作者が持っていた中華文化の伝統に対する憧憬が表面に出て、そして嫌悪から和解へと結末が転じていったのであろう。それは平和で豊かな生活を得た作者の中国との和解を象徴していると言えよう。

終わりに

こうしたスライド手法は、心水の作品の必然的な特徴で、凌鼎年の武俠微型小説評者が指摘するように、まだ成熟途上の武俠微型小説の試みのの一つであろう。ただ武俠というきわめて中国的な文化が、突如オーストラリアで展開されるという点に、違和感を覚える読者も多いと考えるが、03-1の「挑戦」や03-2の「擂台」に描かれているように、中国武術の師匠にとって道場は現実の世界であって、空想ではない。むしろ中国から中国文化を体現する俠士という、西洋社会にはないタイプの人間が、異国社会に適應する姿が描き出されることによって、オーストラリア華人の移住者としての現実的生活感覚が反映されていることを読み取ることができるのである。